

## 『モリソン旅行記』

——シェイクスピア時代のヨーロッパを巡る——

訳・注 その①

## 道 行 千 枝

## 第 1 部

## 第 1 卷

## 第 1 章

イングランドのロンドンを出発。シュターデ (*Stade*)<sup>1</sup> を経由し、ハンブルク (*Hamburg*)、リューベック (*Lübeck*)、リューネブルク (*Lüneburg*)

---

ファインズ・モリソン (Fynes Moryson, 1566—1630) は国庫年報管理官トマス・モリソン (Thomas Moryson, ? ~1591) の子としてリンカーンシャーに生まれた。ケンブリッジ大学で修士号を修めたのち、同大学で民事法の研究を続けたが、1589年に政府より国外視察の許可を得、1591年以降約六年間にわたりヨーロッパ大陸を巡歴した。『旅日記 (*An Itinerary*)』はモリソンがこの間に訪れたドイツ、ボヘミア、スイス、オランダ、デンマーク、ポーランド、イタリア、トルコ、フランスの9カ国、これにイングランド、スコットランド、アイルランドを加え計12カ国の合わせて十年間に及ぶ旅の見聞録である。執筆はまずラテン語で、ついで作者自らの手で英訳され、1617年に三部構成で出版された。本翻訳は1971年に *The English Experience* シリーズ第387巻としてファクシミリ版で出版されたもの [Fynes Moryson, *An Itinerary* (Amsterdam & New York: Da Capo Press, 1971.)] にもとづく。

## 訳文中の括弧について

- ( ) ——地名はカタカナ表記のあとに欧字表記を挿入した。綴り字は現代綴りに統一してある。原文の綴り字が現代綴りと異なる場合はそのつど脚注に示した。その他の本文中の ( ) は原文どおり筆者モリソンによる挿入句。
- “ ” ——原文からの抜粋。
- [ ] ——訳者による補足。

1 原文の綴りは “Stode”。

に至る。ハンブルク再訪。ついでマクデブルク (*Magdeburg*)、ライプチヒ (*Leipzig*)、ヴィッテンベルク (*Wittenberg*) へ。さらにその近郊の諸都市を巡る。

ケンブリッジ大学ピーター・ハウス・カレッジに学び18歳になった時、私は人文学の学士号を得、程なくしてエリザベス女王の命によりこのカレッジのフェローに任ぜられた。大学での最初の学位を得て3年の満期が来る頃に、文学博士号を取得。それから1年のうちに博士やフェローの方々のご好意に満ちた推薦を受けて、当時空席のあった民事法研究のための荣誉ある職を得ることができた。こういった次第で、仕事から箔をつけるという意図も然る事ながら、それ以上に国外の諸地域を巡ること（これについてはこの仕事を望んでいるという私の胸のうちを数年前に両親に最初に明かした折に彼らからは承諾を得ていたことだった）によって経験を積みたいというかねてからの願いも手伝って、「2名を旅行に出すことを許可する」という協会の規定に後押しされ、先の博士とフェローの方々から海外巡歴の認可をいただいたのであった。時は1589年、満23歳になっていた。こうして私は即座に大学を離れるとロンドンに出た。そこで今回の旅路に備えて手筈を整えることにしたのである。ロンドンではさらに多くの事を学んだ。こういった準備期間を経たこと、加えて田舎に友人を訪ねたり、ケンブリッジで受けた同じ学位をオックスフォードに取りに行ったり、それから父や友人が新たに懸念を抱いてこの旅に反対したことによって、私は予定よりも長い間足止めをくってしまったのだった。

ついに時はやって来た。1591年の春、5月1日のことだ。私はロンドンから陸路28マイル、さらに水路で36マイルの地点にあるリー<sup>2</sup>で船に乗り込んだ。テムズ川が川幅を広げて海に注ぐ港町だ。そこから大海原へと乗り出したのである。海に出て8日目。16隻からなる我々の商船団は霧と嵐にもまれ

2 原文では“*Liegh*”と綴られる。テムズ河口のサウスエンド (*Southend-on-Sea*) の東側に位置する *Leigh-on-Sea* のこと。

3 原文では“*Dunkerke*”。フランス領フランドル地方沿岸の町。カレー (*Calais*) より東北東35キロ。私掠船の停泊地としても知られた。

てちりぢりになっていた。私の乗っていた船はダンケルク (Dunkerque)<sup>3</sup> の海賊船2隻に追われる不運に見舞われたのだが、ありがたや、2、3時間もすると霧が晴れ、我々が〔脱出用〕手漕ぎ舟を降ろしているちょうどその時に、仲間の船が2隻こちらに向かってやって来た。これを見て諦めたのか、海賊船はそこで追跡を打ち切った。我々を狙ったのが海賊船であることは明白。というのもこちらが試しに帆の向きを変えると、むこうも同じ進路を取ろうとしたからだ。そこで我々は逃げながらも闘う構えでいたのだが、かくなる次第で神の御加護により無事に救い出されたのだった。9日目に入り日も暮れる頃に、船は「聖なる島“Holy-land”」(土地の人はヘルゴラント<sup>4</sup>と呼ぶ)という島にたどり着いたが、エルベ川に入るのは翌日の朝まで待とうということになり、帆を全て降ろすと、夜の間は船が波を受けてゆらゆらと揺れるがままに任せていた(船乗りたちはこれを「波任せ」という)。島には1つしか港がなく、規模は6隻ばかりが停泊できるほど。三日月の形をした湾は東に向け口を開いていた。島の北側には巨岩がそびえ、残る沿岸部は全て断崖で縁取られていた。この島はホルシュタイン (Holstein) 公の領地で、つまるところデンマーク王の領内にあるということになる<sup>5</sup>。住民は極

4 原文では“*Heiligland*”。ニーダーザクセン沖の北海に浮かぶ *Helgoland* (または *Heligoland*) 島のこと。ウェーザー (Weser) 川とエルベ (Elbe) 川の河口に面しており、モリソンはこの島からエルベ川に入り、上流へと進路を取る。

5 ホルシュタイン (原文では“*Holste*”) は現在、北部のシュレスウィヒと共にドイツ最北端シュレスウィヒ・ホルシュタイン (Schleswig-Holstein) 州を構成する。この地域には古くからデンマーク人とドイツ人が共存していたが、シュレスウィヒ (公爵領) は中世初期からデンマークの支配下に、ホルシュタイン (伯爵領であったが、1474年に公爵領に格上げされる) は主にドイツ人の居住地で神聖ローマ帝国領に入っていた。すなわち北はデンマーク、南はドイツに属していたのだが、14世紀に入るとホルシュタイン伯シャウエンブルク家を共通の支配者とする同君連合を結んだ。1459年にシャウエンブルク家が断絶すると、両公国の貴族は翌年デンマーク国王を共通の支配者に選んだ。ここにデンマーク国王がシュレスウィヒ公爵とホルシュタイン伯 (公) 爵を兼ねるといふ新しい同君連合が始まり、なお両公国は「永遠に不可分」と約定された。ただし従来通りシュレスウィヒはデンマークを宗主国とし、他方ホルシュタインは神聖ローマ帝国の一部であり続けたのであり、共通の君主を戴く「不可分」の両公国が宗主国を異にするという複雑な関係が形づくられた。この関係は1806年に神聖ローマ帝国が崩壊し、ウィーン会議によってドイツ連邦が結成されてからも続き、デンマーク国王はホルシュタイン公の資格でドイツ連邦の構成者となった。

めて貧しく、年貢には公爵の館の建築材料として石を納める他に手は無しという暮らしぶり。島の円周は約3マイル。居住数は100世帯くらいであろう。

10日目。我々はエルベ川を遡<sup>さかのぼ</sup>ってシュターデ (Stade)<sup>6</sup> に上陸した。帝国内に幾つかある自由都市<sup>7</sup> のひとつで歴史は古く、また幾つかある港町のひとつでもあった。近郊地域との交易がしやすいという利点を持つこういった都市のことを「自由都市」(土地の言葉では Hanseaten<sup>8</sup>) と呼ぶ。実のところさほど昔の話ではないが、この町は落ちぶれていた。というのも造幣権と他にも似たような権利の数々をハンブルクに売り渡してしまっていたからである。しかしやがてイギリスの商人達がハンブルクからシュターデに貿易の拠点を移すようになり、最近になって町は栄え始めた。これがハンブルク人のねたみと窮乏を招いたことは言うまでもない。ドイツで私は宿屋で一回の食事につき4.5リューベック・シリング<sup>9</sup>を払った。ちなみにイングランドでは同様のものに英貨8ペンス<sup>10</sup>。エルベ川は潮の満ち干がリューネブルク (Lüneburg)<sup>11</sup> まで及ぶ曲がりくねった流れの急な河で、航路と浅瀬の区別

6 ドイツ北西部、下ニーダーザクセンの都市。シュウインゲ (Schwinge) 川がエルベ川に注ぐ河口に位置する。

7 ドイツでは13~14世紀頃、国王、司教、世俗貴族などの都市領主から大幅な自立を獲得する都市が現れ、これらは「自由都市」と呼ばれた。主にバーゼル、ケルン、シュトラスブルク、ウォルムスなど司教都市に多い。旧来の帝国都市が負っていた皇帝に対する軍役・貢納義務からも解放されており、従ってその法的地位は帝国都市のそれより勝っていた。しかし有力な帝国諸都市との区別は明確でなく、両者はしばしば自由帝国都市 (freie Reichsstadt) として一括される。

8 原文では“Hansteten”。ハンザ (Hanse) 同盟都市のこと。

9 リューベック・シリングとはリューベック市の発行したシリング銀貨のこと。中世以来ドイツでは貨幣の発行が各都市や自治体によってなされていたため、貨幣制度は地方によってまちまちであった。ドイツ帝国内に一貫した貨幣制度が敷かれたのはマクシミリアン二世 (在位1564—76) の頃。1566年、「貨幣の告別 (Münzabschied)」と呼ばれる布告が出され、オーストリアを除く国内の流通貨幣は全て帝国貨幣として皇帝の管理下に置かれた (久光重平著、『西洋貨幣史・中』, 国書刊行会, 1995., pp. 801-806.)。しかし、16世紀末から17世紀にかけては偽造貨幣が横行し、品質劣悪な合金の小銭が流布していた (同上 p. 1014.)。

10 1シリング=12ペンスであるから、ドイツでは同じ物に対して約6倍の額を払ったことになる。貨幣単位は同じであっても種類や地域によって価値に相当の差があることがわかる。

11 ドイツ北部ニーダーザクセンの都市。10世紀以来岩塩の産地として名高く、塩取引によってリューベックと結ばれ、中世を通じてハンザ都市の中で有力な地位にあった。

を示すためにブイが設置されており、これらのブイは1つにつき年間40ポンドの維持費がかかる。全部を合わせると少なくとも経費は一千ポンドにのぼり、これをシュターデとハンブルクの両市が負担する。霜が降り始めるとブイは陸揚げされ、翌年の春まで保管される。かつてシュターデが栄えていた頃は、周囲の諸都市から寄付金を集めつつ、この市の財政だけで前述の経費を賄っていたようだ。当時、市の摂政にはブレーメン (Bremen)<sup>12</sup>の主教が選ばれており、歳入は年にたったの英貨90ポンドでしかも不定期なものだった。しかしこの土地の肥沃さはたいしたもの、牛の搾乳は日に三度にのぼる。少し前にハンブルク市は艦隊を送ってイギリス商人のシュターデ入りを禁じようとしたが、無駄に終わった。彼らがシュターデの町で商取引を行うことに苦い思いをしていたハンブルクは、信仰の自由を束縛しただけでは収まらず強制取りたてを敢行。時には有利な協定を提示したり、時には武力に訴えるなどしてイギリス商人達を引き戻そうと躍起になったのだった。一方シュターデの商人はここを通過するライン産ワインを先買、選抜できるという特権を有している。市の防衛は目下進行中の工事が完了した暁には堅固なものとなっていよう。北側と東側に広がる平野は「敵の来襲に備えて」水没させることができる。しかし（やや距離はあるが）西側と南側に位置する小高い丘陵地帯は、奇襲攻撃をかけられる危険性を抱えている。そこで市の西南側には高くぶ厚い土塁が築かれ、外側は柳で補強された。ここにはさらに、あらゆる軍需品を備えた武器庫が建てられた。一方市内に通じる門には色を塗りたくった石造りの投石器が備え付けられ、滑稽なほど武力を誇示している。市壁の外、西側一帯はブレーメンの主教が所有しており、東側はシュネーベルク (Schneeberg)<sup>13</sup>伯とホルシュタイン公<sup>14</sup>のものである。シュターデ

12 ブレーメン（原文では“Breme”）はドイツ北西部のハンザ加盟都市。外港にブレーマーハーフェン (Bremerhaven) を持つ。フランク王国時代の787年に司教座が置かれ、北方伝道の拠点となったことがこの町の起源であり、ハンブルクにすでに置かれていた大司教座もやがてブレーメンに移された。宗教都市として発展したが、10世紀以降は皇帝から商業に対する保護特権が与えられ、側を流れるウェーザー川を活かして商業都市として成長した。

13 原文では“Scheneburg”。ニーダーザクセン中東部に位置する。

14 “Holst”。前述“Holste”に同じ。原文には綴り字の不統一がしばしば見られる。

からハンブルクまでは5マイルの道のり。まず、ひとりあたり5リューベック・シリングを払い、貸し馬車に乗って2マイル進む。エルベ川を渡ると(嵐だったことに加え、浅瀬もあって危険な渡河だった)、別の馬車を今度はひとり4リューベック・シリング払って借りた。それから深い森の中を3マイル進むとようやくハンブルクに到着。ここまで水路で移動した方がずっと簡単だったろう。とりわけ土地に不慣れな者にとってはそのほうが良かったかもしれない。シュターデからハンブルクまで毎日船が出ており、逆風でなければ3時間ほどで着く。料金はひとり3リューベック・シリング。しかし風向きに恵まれオールを使う必要のない場合を除いて、乗客はどんな事情があろうとも全員船を漕ぐか、さもなければ自分の代わりに漕ぎ手を雇うかしなければならない。それに加えて同船者の中に粗野な客が居合わせた場合、まともな類たくいの人はそのために気分を害されてしまうことだってあり得る。

ハンブルクは帝国内における自由都市、すなわち(先にも述べたが) **Hanseaten**<sup>15</sup> と呼ばれるもののひとつで、壮大な建造物と人口の多さを誇る。議事堂は非常に美しく、九偉人<sup>16</sup>の彫像が外観を飾る。商人が集まる取引所はまことに素敵な場所だ。港は鉄の鎖で封鎖されている。市の周りは深い堀で囲まれ、東側と北側は二重の堀と壁で守られている。生活用水は数イギリス・マイル<sup>17</sup>離れた丘から、木のパイプを通して市内へと導入される。鉛のパイ

<sup>15</sup> 原文では“Hans-steten”。注8“Hansteten”に同じ。

<sup>16</sup> ユダヤ人のヨシュア、ダビデ、ユダ・マカビウス、異教徒のヘクトル、アレキサンダー大王、ジュリアス・シーザー、キリスト教徒のアーサー王、カール大帝、ブイヨンのゴドフロワ(低地ロレーヌ地方の公爵で十字軍遠征の初代指揮官。1099年に聖墳墓護民官 Protector of the Holy Sepulchre に任ぜられる)といった古代伝説および中世騎士物語に登場する九人の英雄。

<sup>17</sup> 「マイル」は英語圏で使用される距離単位で約1.6キロだが、これと語源(ローマ時代の「1,000歩」*mille passus*)を同じくするヨーロッパ諸国の距離単位を英訳する際にも適用された。これが転じてドイツ、オランダ、スカンジナビア諸国などで使用される古ゲルマン語 *rasta* (約4.5キロ)を語源とする語についても、英訳に *mile* が用いられることになる。この場合、1マイルの距離は“English mile”の約3.25~6倍以上に相当する(O. E. D., “mile” 2.)。モリソンがわざわざ「イギリス・マイル(“English mile”)」とするのは、こういった背景があるからである。一方、単に“mile”とある場合は「ドイツ・マイル」を指している。しかし、それさえも地方によって距離にかなりの差違が見られる。注20、注33参照。国松孝二編『独和大辞典』(小学館、1989、第5版)によると「イギリス・マイル」1609mに対し「ドイツ・マイル」は7532mとある。

プだと中が凍って破裂してしまうからだ。これらのパイプは橋の下の目に付くところを走っていて、それを通して各市民の家に水が運ばれるという仕組みだ。市の管轄区域は市壁の外側1、2マイルに及び、ある部分では3マイルに達するところもある。ハンブルクには9つの教会と6つの門があり、門にはそれぞれその先につながる町の名が付けられている。市は砂質の広い平野の中に位置し、郊外には肥沃な牧草地が広がる。南側と西側の一部には縁に沿ってエルベ川が流れており、その支流が市の中にも入り込んでいる。一方北側とやや東寄りの方にはアルスター（Alster）川<sup>18</sup>がシュターデ方面に向かって流れ、エルベ川に合流している。街道は「大通り」（土地の言葉では“Breitgasse”）を除いてどれも幅狭い。建物は全て煉瓦造りで（これはこのあたりからフランドル地方に伸びる海岸沿いの町全てに共通のことだ）、家屋の見栄えのする部分は全て一番表の玄関に集中している。まず大広間へと続く幅の広い立派な門があり、広間一階は貯蔵庫として使われている。二階には玄関口から見える所に主な家財道具が置かれていて、とりわけ目に付くのはピカピカに磨かれたイギリス製のしろめの食器類で、側を通る者にまばゆい光を投げかけている。こういった具合に家屋は内側よりも外側からのほうが見栄えがする場合が多い。ハンブルクでは一回の食事に4リユーベック・シリング、宿泊代に一晩1リユーベック・シリング使った。市民はとんでもなくイギリス人（ばかりか外国人なら誰かれ構わず）に意地悪で、午後には戸外を歩くのは危険だ。下層市民がほろ酔い気分になると、外国人に危害を加えることがよくあるからだ。私自身ある日のこと、積み荷を下ろしながら薪を数えている男達のそばを通った時に、こんな言葉が耳に入ってきた——“Wirft den zehenden auff des Englanders kopf”。10本目はイギリス野郎の頭に投げつけてやれ、という意味だ。だが、私も連れの人々も彼らがイギリス商人のシュターデへの鞍替えにひどく腹を立てていることを知っていたので、ここは黙って意味の分からぬふりをして通り過ぎるが良しとしたの

<sup>18</sup> エルベ川の支流でドイツ北西部を流れる。ハンブルクの31キロ北、カルテンキルカーン（Kaltenkirchen）の南東6.4キロ地点を水源とし、そこからハンブルクに向かって南に流れ、エルベ川に合流する。

だった。この地から帝国都市リューベック (Lübeck)<sup>19</sup> まで足を伸ばす。ここは先にも述べた自由都市のひとつでもあり、ハンブルクから10マイルの地点に位置する<sup>20</sup>。我々は馬車賃にめいめい20リューベック・シリングを払うと、朝早く出発して湿地帯と砂地を横切り、オークの林 (ドイツ高地でモミの林がよく見られるのと同じくらいこの辺りにはオークがたくさん生い茂っている) を幾つも通過して6マイル進んだあたりでオルデスロー<sup>21</sup> という村に着いた。湿って沼の多い地帯にあるためにこの名前がつけられた<sup>22</sup>。ここで昼食にひとり5.5リューベック・シリング払った。連れのオランダ人はさらに食後の酒に前述の額の半分をつぎ込んでいた。午後に我々はリューベックまでの残る道のり4マイルを4時間かけて進み、町まであと半マイルという地点でオークの森を通過したが、所々途切れたところは美しい牧草地になっていた (景観のゆえか、それとも伐採するには追いつかないほど広大でしかもいたるところに茂っているためか、ドイツではできるだけ森林をそのままにしておこうとするのが常である)。森を抜けると小高い丘が2つ見え、その先の3つ目の丘にリューベックの町が広がっていた。

この3つ目の丘の頂には端正なたたずまいの聖マリア教会がそびえ、そこから全ての市門につながる下り坂が伸びている。このような配置にある市の全貌はすばらしい眺めを醸<sup>かも</sup>し出しており、この町ではさぞかし荘厳な建築物を見ることができるだろう、と訪れる者の期待をあおる。市は二重の防塁に囲まれていて、ひとつは煉瓦造りで厚みは薄く、もうひとつは土でできた幅広のもので、密生した柳の列で補強されている。北側と南東側では防塁が途切れていて、代わりに満々と水を湛<sup>たな</sup>えた深い堀が巡らされている。南東の部

19 ドイツ北部、バルト海に注ぐトラーベ (Trave) 川河口より約20キロ上流に位置する港湾都市。エルベ川とは運河で結ばれる。1159年にハインリヒ獅子公 (注40参照) により建設された。ハンザ同盟の盟主として繁栄し、ドイツ帝国内ではケルンと並ぶ大都市であった。

20 ハンブルクからリューベックまで直線距離で約55キロ。モリソンが最短距離を取ったとしても1マイル約5.5キロの計算となる。これは「イギリス・マイル」の3倍以上。実際にはあちこち迂回しながらのルートであったろうから、1マイル5.5キロとはいかなかったであろう。

21 原文では“Altslow”。正式にはバート・オルデスロー (Bad Oldesloe)。

22 ‘Bad’ は「風呂の水」の意。



分は堀の幅が一見狭くなっているが、深さがあるため、数千トン規模の船舶が町まで運航してきて冬の間じゅう停泊できるようになっている。その際船の積み荷はバルト海に面したこの市の外港、トラヴェミュンデ港 (Travemünde)<sup>23</sup> でひとまず降ろされる。我々はリュウベックから1マイル離れたこの港に、3時間かかって到達した。出費額は馬車賃にひとり5リュウベック・シリング、食事に4リュウベック・シリング。その夜のうちにリュウベックに戻った。この町の建物は非常に美しく、すべて煉瓦造りで、市壁の外にはこの上なく快適な散歩道が続いている。市民は悪臭の対策に入念で、そのため肉屋は市壁の外に流れる小川の上に屠殺場を建てている。生活用水はパイプを通して各市民の家まで運ばれる。醸造所には鉄製の水道栓が備え付けられていて、栓を開けると樽に水が注がれるという仕組みになっている。市の建築物に使用される建材は近郊の諸都市に見られるものと変わらない。にもかかわらずこの町がとりわけ好ましい印象を与えるのは、美しく均整の取れた家並み、素敵な庭、立派な市道、市壁の外側に敷かれた快適な散歩道、そしてそこに住む人々自身にあるのだろう。その礼儀正しさと公正さを貫く姿勢は称賛に値する。貧民は公道から離れた区画に住んでいる。“Funff Haussgasse” すなわち「五軒通り」という名で呼ばれる通りがあるが、その由来は1278年にこの通りの家屋が5軒を除いて全焼してしまったからである。以来、木材と粘土を家の建材に使用することは、幅3フィート〔約91.5センチ〕の煉瓦製の壁で隣接する家との間を仕切る場合を除いて禁止となった。それに加えて屋根には瓦、真鍮および鉛以外の材料を使ってはならないというきまりが定められた。市はひし形のようなかたちで真ん中が幅広く両端は先端に向かうにつれて狭くなっており、南端はバーク (Burg) 門<sup>24</sup> から北端メルン (Möllen) 門<sup>25</sup> まで南北に伸びている<sup>26</sup>。我々は西側のホルステン (Holsten) 門<sup>27</sup> から市内へと入ったが、これと対角線上東側に位置するの

<sup>23</sup> 原文では“Tremuren”。リュウベックとはトラヴェ (Trave) 川で結ばれている。

<sup>24</sup> 原文では“Burke”。

<sup>25</sup> 原文では“Millen”。

<sup>26</sup> これはモリソンの勘違いであろうか。実際には市の北側に位置するのがバーク門、南側にメルン門。

<sup>27</sup> 原文では“Holtz”。1477年建造、ゴシック式。

はヒクステル(“Hickster”)<sup>28</sup> 門である。市は縦横に大きく広がり、“Breitgasse”、すなわち「大通り」と“Konnigsgasse”、すなわち「国王通り」のふたつの通りが市を横断し、これに平行してさらに6つの道が敷かれている。これらのどの道も、真ん中に立つとそこから通りの両端が見えるような構図だ。ここでは食事一回につき4リューベック・シリング、宿代込み。ライン産ワイン1クォート[約1.13リットル]分に5リューベック・シリング、そしてサック酒にも同額を費やした。美しいたたずまい、土地の人々の人情深さ、おいしい食事、どれをとってもドイツの中でこの町ほど快適な滞在地は他にあったか、ちょっと思い付かない。市民は来訪者にはあまねく丁寧に対応する。この町の法律は、一時的に滞在するだけで定住するのではない限り、異邦人には地元の住民に勝る特別優遇措置を取っている。英国人に対しても分け隔てなく友好的である。我々英国人から受ける海上での「不法行為」(と彼らは言う)<sup>29</sup> に憤慨してはいたが。ところで市内には一見すべき名所がたくさんある。ここには立派な教会が10もあり、そのひとつは戦時に備えてあらゆる軍備品を収容する武器庫として使用されている。聖マリア大聖堂(土地の言葉では“Unserfrawkirke”)<sup>30</sup> は群を抜いて優美で、技巧を凝らした立派な時計が備え付けられており、建物最上部の絵は画中の人物の両耳まで見えるもので、画家達の間では名画の誉れが高い。袖廊には大理石の柱が3本立並び、それぞれ長さ30フィートで継ぎ目無し。ただし、ひとつは1フィート分だけ継ぎ足してある。さて、この教会に置かれている聖母マリア像とバーク教会に架けられたキリスト像は秀抜な芸術作品とされていて、噂によるとあるスペインの商人が莫大な金を出して買い取ろうとしたことがあるそうだ。

<sup>28</sup> 現在の Hüter 門のことか。

<sup>29</sup> 英国政府による「航海法」(Navigation Acts)のことか。リチャード二世(在位1377—99)以来の英国政府が発布した海運・貿易規制のための「航海法」により、英国は自国に有利な貿易を展開し、競争国を苦しめた。ちなみにここで言われている「海上」とはバルト海のこと。中世のバルト海貿易は事実上ハンザ同盟の独占するところとなっていたが、中世末からオランダ人・イギリス人がハンザの独占に挑戦。ハンザ勢力もしだいに衰え、近世に入ると大西洋・太平洋航路が国際貿易の中心となる。モリソンがこの地を訪れたのはこの転換期の直前の頃で、未だバルト海貿易が盛んであった。

<sup>30</sup> ザンクトマリエン教会(St. Marienkirche)のこと。今日でも北部ドイツで最も美しいゴシック式教会として名高い。

私も正直なところ石でできたこの聖母像を見つめるうちに、かつては白い粗衣<sup>31</sup>をまとっていたのだろうと想像を膨らませてしまったほどだ。彫刻に関しては全くの素人の私でさえ、これを作り上げた職人の腕には感嘆する。メルン門を出たところには市内全域へと水を送る水道管が敷設されている。これはロンドンやその他の地域にこのようなものが普及する以前に実用化された最初のものということで名高い。町の外周を快適な散歩道がぐるりと囲んでいるが、とりわけエルサレム（当地の人は、数本の柱に彫り込まれたキリスト受難の彫刻画をこう呼んでいる）に向かう道はすばらしい。そこには心地良い木立があり、縄編み職人や似たような生業<sup>なりわい</sup>の職人達がその木陰のもとで仕事に励むのが常である。大聖堂の参事会員は多大な特権を有しており、言うなれば彼ら自身が自らの上に君臨する専制君主といった具合で、かつては好きな時に市に出入りするための専用門さえ持っていた。しかし、いかなる制圧からも自由な立場を守りたいとする市民達はこの事態を危険視して、皇帝の訪問を好機と見て取るとわざわざくだんの門から皇帝を迎え入れ、そこで両膝をついて嘆願したのである。どうかこの門を煉瓦で塞いで二度と開かないようにしてください、この門を通る御方は陛下で最後にしていただけませんか、と。

リュウベックから我々は一路リュウネブルク<sup>32</sup>へと向かった。目的地までの道のり10マイル<sup>33</sup>。最初の晩はメルン村に泊まったが、この村にはかの有名な道化師オイレンシュピーゲル（我々が「ふくろうの眼鏡」と呼ぶ、あの名高い芸人）<sup>34</sup>の記念碑が建っている。没年1350年。墓石の周囲には、通り掛かりの旅人が石を砕いて少しずつ持って行ってしまふのを防ぐために鉄格子が張り巡らされている。実は一度ドイツ人の一行がそんなことをやらかし

31 原文では“a gowne of white buffin”。“buffin”は織目の荒い布で、エリザベス朝期に中流階級の間で長上衣の布地として使用された。

32 注11参照。

33 直線距離で約70キロ。したがってここでは1マイルが約7キロ以上と推定される。

34 原文では“Oulenspiegel”。ティル・オイレンシュピーゲル（Till Eulenspiegel）は14世紀に活躍した伝説的な道化師で、実在したかどうかは定かでない。1510—11年に彼を題材とした滑稽話『ディル・ウーレンシュピーゲル（Dyl Ulenspiegel）の退屈しのぎ話』がシュトラスブルクで出版され、好評を呼んで何度も版を重ねた。

たことがあるそうだ。この町の人々は毎年彼を記念して祭りを催し、今日でも彼が着ていたゆかりの衣裳を披露する。この地方は痩せた砂質の土地で、鬱蒼としたオークの森がいたるところに見られる。ところで“Kasborough”城<sup>35</sup>には皇帝の命により下ザクセン公が投獄されているそうだ。現在この公国<sup>36</sup>を統治しているのは公爵の弟だが、兄の散財により多額の負債を抱えている。この付近の村落は抵当に取られてしまい、今やハンブルクとリュューベックの所有するところとなっている。我々はエルベ川を二度渡ったが、馬車の渡船料は御者が負担し、我々のほうはめいめい1リュューベック・シリングを払った。エルベ川を南に超えると大地はいくぶん肥沃さを増す。メルンでは夕食に4.5リュューベック・シリング払った。

翌日我々はリュューネブルクに到着した。この町は自由帝国都市のひとつで、自由権を保持しようとする市民によって堅固な防塁で守られている。しかし、その一方でリュューネブルク公が市の支配権を主張している。土で造られた防塁は高く幅広で、さらに深い堀が町を囲む。また市内の建造物、とりわけ議事堂は非常に立派で、家屋はほぼ全てが煉瓦造り。大きな市場がふたつあり、通りは広いがとても汚く悪臭が漂う。円形に近い形をした市は谷あい位置し、西側には山が接近しており、東側にもだいたい距離を置いて山岳が連なる。北側には標高の高いカルクベルク (“Kalkberg”) 山<sup>37</sup>がそびえ、その頂には今から溯ること60年前に市民達が攻落した守りの堅い城が建っている。市街地から程遠くない所にルナ (“Luna”) という修道院があるが、一説ではリュューネブルクの名称はここから取られたものだと言われている。また別の説によると、市の名はそのそばを流れる今日はイルメナウ (Ilmenau)<sup>38</sup>と呼ばれる川に由来するらしい。11の支流が流れ込むこの川は、歴史書によるとかつてルナと名付けられていたことが明らかにされている。もう一つに、川と市のどちらもが月形のツノをふたつ持つ偶像神イシス<sup>39</sup>にその名の起源を持つと

35 未詳。

36 ニーダーザクセン東部に位置するブラウンシュヴァイク・リュューネブルク太公国のこと。

37 未詳。

38 原文では“Elvenau”と綴られる。

39 古代エジプトの太陽神オシリスの妹にして妻、ホルスの母。オシリス神話では、夫の遺骸をつなぎ合わせてミイラとして復活させたとされ、オシリス信仰の普及と共に死

いう主張も聞かれる。かつてカルクベルク山頂の城にはイシス神の彫像が安置されていて、人々の信仰を集めていた。この町でとりわけ見物すべきものの中に、塩水の泉とそれを煮て塩を作る工場がある。工場の門にはこのような碑文が刻まれている。

“Ecce salinarum dulcissima dona coquuntur.

Gratuita summi de bonitate Dei:

Mons, Pons, Fons, tua dona Deus, da pectore crescat,

In nostro pietas, nec minuatur Amor.”

見よ この泉のもたらす なめらかな塩

天より注ぐ 主の愛と無償の恵み

山、橋、泉、どれも主の恵みの品々

我らが信仰と愛も いや増さん

リューネブルク近郊に住む貧民、および市民は誰でも家庭での使用に限って好きなだけ塩水をもらえる。かつて人々が貧民に塩水を分け与えまいとすると、たちまち泉の効用が失われてしまったという言い伝えがある。泉の門番には、他の国では順序が逆だが、門を出る時ではなく入る時に木戸銭を払うことがこの国の習しだ。というのもドイツ人の間では、報酬は仕事に取り掛かる前に既にやり遂げたものとして前払いされるのが正式とみなされるからである。塩泉の利用権はいくつかに分配され、その持ち分は市にいくらか、リューネブルク公にいくらか（リューネブルク公と呼ばれているにもかかわらず、公爵は市に対し何の統制力も持ち合わせておらず、統治権が及ぶのは市の管轄区の外側のみ）、修道院にいくらか、諸伯爵にそれぞれ少しずつ（中には自ら製塩せずに名義貸しする者もいる）となっている。工場の中には作

---

者の守護神・死者を復活させる呪力の所有者・母神として広まった。「月 (Luna)」は満ち欠けすることから死と復活を表すイシスの象徴。ギリシャ・ローマ時代にアレクサンドリアの守護神から航海の守護神となり、イシスを宇宙神とする秘儀宗教的な信仰がローマ帝国全体に広がった。その聖所はローマ、ケルンなど西ヨーロッパ各地で発見されている。姿はしばしば日輪と雄牛の角を頂く女性として描かれる。

業場が52部屋あり、それぞれに鉛製の鍋が8つ据えられていて毎日8トンの塩が造り出される。1トンあたりの売り値は8フランドル・シリング。町の中に位置する前述の修道院にはザクセン公ハインリヒ獅子公<sup>40</sup>がミラノから持ち帰った金のテーブルが飾られている。それは祭壇に固定されていて、大きさは縦が1.5エル以上もあり、横幅は約0.75エル<sup>41</sup>。厚みはフランスのクラウン硬貨<sup>42</sup>と変わらぬくらい。院内にはまた、純金製の十字架が4つ掛かっており、昔ある女王が修道院から持ち出したことがあったが、間もなく本人が発狂してしまい十字架を元の場所に戻すまで治らなかったという。大通りには側壁に石碑が幾つもおめ込まれているが、これらは公爵が市に奇襲をかけようとした騒乱の一夜に命を投じた町の名士達を記念したものである。議事堂は立派な造りをしていると述べたが、ここにはこの規模の都市にしてはまことに莫大な価値の、そして量にしても相当な数の貴金属の食器類が陳列されている。さて私はリュネブルクから再びハンブルクへと舞い戻った。私と連れは4ドル<sup>43</sup>払って馬車で移動することもできたのだが、その金額がどうも気に食わなかったのでリュネブルクから3マイルのヴェンド地方(Wenden)<sup>44</sup>までは各々3リュネベック・シリング出して荷馬車を借りるこ

40 ハインリヒ獅子公 (Heinrich der Löwe, 1129?—95, 原文では“Henry Leo”) はヴェルフェン家のザクセン公 (在位1142—80) で、1156年からはバイエルン公を兼任した。東北ドイツで領地を形成・拡張し、バルト海沿岸地方にまで支配を広げるとともに同地方の教会支配権をも握った。国王フリードリヒ一世のイタリア出兵命令を拒否したことで国外追放に遭いイギリスに一時亡命。帰国後フリードリヒ一世の後を継いだハインリヒ六世と和解したが、大公位を回復できずブラウンシュヴァイクとリュネブルクの世襲領を領有するのみにとどまった。

41 1エルは45インチ (約114センチ) に相当する。従ってこの食卓のおおよそのサイズは縦171センチ、横85センチ。

42 元来は1339年ヴァロア家のフェリペにより造幣された、表に王冠の刻印の入った金貨 (denier à la couronne)、もしくは1384年以降にシャルル六世のもとで発行された、盾の周りを王冠が囲む模様が刻まれた銀貨 (écu à la couronne) の英名であった。しかし15~18世紀には一般にエキュ銀貨 (écu) を指すものとなった。

43 「ドル (dollar)」はドイツの大形銀貨「タレール (thaler)」の英名。価値は地域により差があるが、一般に高額貨幣として通用した。『西洋貨幣史・中』によると、1484年に皇帝フリードリヒ三世の命でティロル伯ジクスムントがグルデン金貨 (注49参照) に相当する価値の大形銀貨として造ったのがタレール銀貨の始まりであった (pp. 655-657.)。

44 原文では“Wentzen”。ドイツ東北部の一地方。ドイツ人の東方定住が進むにつれこの

とにした。ここはリューネブルク公領の境界上の町で、公爵に対して誰もが1リューベック・シリングずつ納付金を取られるのだが、私だけは免れた。大卒の特権である<sup>45</sup>。ここでめいめい2リューベック・シリングずつ払って荷馬車に乗り、1マイル先のエルベ川へと向かった。その日のうちにハンブルクまで水路を3マイル進んだが、舟に乗り合わせた粗野な連中のせいで不愉快なこと無きにしもあらず。船賃はひとり3リューベック・シリング。読者の方々にご忠告するとすれば、エルベ川を渡るためだけに舟に乗るくらいならトルスペッケル (“Tolspecker”) 村<sup>46</sup>からハンブルクまで荷馬車を借りるほうが良い。こうすれば、距離にして3マイルのところを6人で2ドル。さて私はハンブルクからマイセン (Meissen)<sup>47</sup>まで足を伸ばすつもりでいたが、現地の言葉に不案内なため、ある商人に掛け合って馬車に同乗させてもらい、さらにライプチヒ<sup>48</sup>までは私の旅の諸経費を肩代わりしてもらおうという取り決めを交わし、これに10グルデン金貨<sup>49</sup>を支払った。

第1日目、我々はハンブルクで朝食を取った後リューネブルク高原地帯を抜けて7マイル進み、ある村で宿を取った。移動の途中で幾度となくみすばらしいあばら屋が並ぶ集落のそばを通過し、時には感じの良い木立を抜けたりした。この地方は全体に渡って痩せた土地で、所々に穀物畑が見られたが、その数は決して多くはない。2日目に我々は同じように続く痩せた土地を進み、その日の旅が終わる頃に1マイル続く鬱蒼とした森を通り抜け、コルネリエル (“Cornelier”)<sup>50</sup>というこぢんまりとした都市に到着した。3日目、7マイル進み、ハンブルクから数えて26マイル離れたマクデブルク (Magdeburg)<sup>51</sup>にたどり着いた。この日はもっと肥沃で樹木も多い地方を通った。

---

地方に諸都市が形成された。1280年代よりリューベック市の指導を受けハンザ同盟に加わりバルト海貿易の一端を担った(成瀬 治ほか編、『ドイツ史1—先史~1648年—』, 1997., 山川出版社, pp. 350-354.)。

<sup>45</sup> 大卒者は当時の聖職者がそうであったように、法的に優遇されていた。

<sup>46</sup> 未詳。

<sup>47</sup> 原文では“Misen”。ドイツ中東部エルベ川沿いの都市。オーバーザクセンの州都ドレスデン (Dresden) の西側に位置する。ハンブルクからの直線距離約360キロ。

<sup>48</sup> 注68参照。

<sup>49</sup> 15世紀以降高額貨幣として独占的地位を占めていた。(『西洋貨幣史・中』 p. 657.)

<sup>50</sup> 未詳。

途中でボッケスベルク (“Bockesberg”)<sup>52</sup> という丘が見えたが、これは年に一度魔女の集会が開催されるという馬鹿げた伝承のある地として有名だ。この町はかつて「乙女パルテネア (“Venus Parthenea”)<sup>53</sup>」を意味してパルテノポリス (“Parthenopolis”) と呼ばれていたのだが、今日ではマクデブルクすなわち「乙女の町」の名で通っている。こう呼ばれる所以は、この町が内陸部<sup>ゆえん</sup>にあって非常に美しく、さらにドイツの人々の間でも評判の防備の堅さゆえである。ザクセン選帝候モーリッツ<sup>54</sup> が皇帝カール五世<sup>55</sup> の援軍を得て市を1年間も包囲したが、それでも落城しなかったことでその防衛力は証明済みだ。とはいえ私が思うにこれは防御の堅さのおかげと言うよりも包囲者の判断が揺らいだためであろう。彼は間もなくするとドイツ諸侯と手を組み、皇帝の圧政から国を解放しようとしてフランス王に援軍を要請したのである。既に皇帝とは敵対関係にあったフランス軍はここぞとばかりに軍旗を掲げドイツ皇帝に対し宣戦布告した<sup>56</sup>。市の形はちょうど三日月形。ここの主教座には財政力があり、現在はブランデンブルク (Brandenburg) 辺境伯<sup>57</sup> の長

51 原文では“Magdenburg”。ドイツ中東部のハンザ都市。ブラウンシュヴァイク (Braunschweig) の東南東77キロ。968年、オットー一世によりマクデブルク大司教座が敷かれたことにより、キリスト教東方伝道の拠点となる。教会支配が強力だったため、自治・独立はようやく13世紀に入ってから。エルベ川中流域に位置し、交通・商工業の中心地として発展した。

52 未詳。

53 ギリシャ神話のセイレン (Sirens) の一人パルテノペー (Parthenope, 「処女の声」の意) のことか。

54 在位1541—53年。ルター派であったが宗教にとらわれることなく政治的に行動し、宗教戦争中のドイツの政治情勢を左右した。プロテスタント勢力を弾圧しようとしたシュマルカルデン戦争 (1546—47) では皇帝カール五世の側についたが、52年にはプロテスタント諸侯の側に立って皇帝軍を破り、パッサウ (Passau) 条約を結ばせて皇帝のカトリック強制政策を撤回させた。

55 ハプスブルク家出身の神聖ローマ皇帝。在位1519—56年。

56 カール五世の治世にはハプスブルク勢力の強大化を恐れる教皇やフランス、北イタリア諸国、さらに東方のオスマン・トルコが共に手を組んでドイツに対抗したため、皇帝は常に対外政策に悩まされた。同じ頃国内ではルターの宗教改革運動が展開しており、カールはカトリック的な皇帝理念からこの異端の抑圧に勤めたが、皇帝権の強化を喜ばなかった諸侯は1552年、ザクセン公モーリッツを中心にほとんど宗派を超えた反乱を起こし、フランス王アンリ二世もこれに手を貸した。

57 辺境伯 (Markgraf) は国境付近の防衛のために皇帝が設置したマルク (辺境) と呼ばれる広域の軍事・行政管区を管轄する役職をつかさどる。通常の伯 (グラーフ) より



子が行政官の座に就いて、この市と市の管轄区全体を掌握している。彼はまた同じ名目でハレ (Halle)<sup>58</sup> の主教座をも保有しており、目下さほど遠くない距離にあるヴォルムステッド (“Wormsted”) 城<sup>59</sup> に駐在中だ。市内の市場にはこの町の創設者であるオットー大帝<sup>60</sup> を記念する像が立ち、ミュンスター (Münster)<sup>61</sup> によるとローランド (“Rowland”)<sup>62</sup> を記念する像も建てられているというが、私自身実際に見た覚えはない。議事堂には30年ほど前に世を去ったルーカスという著名な画家<sup>63</sup> の手による比類なき名画が飾られて

---

はるかに大きな権限をもち、辺境管区全体に軍事公権と最高の裁判権、全住民に対する命令権を行使したほか、国家領・王領は事実上辺境伯の管轄下にあった。ブランデンブルク (原文の綴りは “Brandenburg”) がマルクとなったのは11世紀頃のことである。この町はドイツ北東部ブランデンブルク州の都市で、ベルリンから西南西52キロ地点エルベ川沿いに位置する。10世紀以来城塞が置かれ、中世ドイツ人による東部植民とともに発展した。

- 58 原文では “Hall”。ドイツ中部の都市。ブランデンブルクから南南東に約75キロ。塩の精製、交易地として古くから栄え、13世紀末には市の権利を得てハンザ同盟に加わった。
- 59 未詳。
- 60 ザクセン朝第二代のドイツ国王 (在位936—973)。父ハインリヒ一世の後をうけて王朝の基礎を確立し、ドイツの国家統一を強力に推進した。962年に教皇より神聖ローマ皇帝の帝冠を受け、初代神聖ローマ皇帝 (在位962—973) となる。
- 61 ヘブライ語学者の S. ミュンスター (Sebastian Münster, 1489—1552) のことか。バーゼル生れ。フランシスコ派修道士からプロテスタントに改宗し、ハイデルベルク大学、のちにバーゼル大学で教鞭を執る。ドイツ人として初めてヘブライ語聖書を編纂。しかし地理学者としての方がさらに有名で、著書『宇宙誌』 (*Cosmographia Universalis*, 1544.) は16~17世紀のあいだ幾度となく版を重ねた。従来の宇宙誌が数理地理的性格の強いものであったのに対し、彼のは地誌に重点を置いた世界地理歴史百科としての要素が濃く、モリソンが参考にした可能性は大きい。
- 62 中世フランスの武勲詩『ローランの歌 (*Chanson de Roland*)』の主人公、ローランのことか。カール大帝の甥でその旗本の十二勇士の一人。数々の武勇伝を残し、スペイン遠征の際に戦死した。ドイツではハインリヒ獅子公 (注40参照) のもとで1170年頃に司祭コンラッド (Konrad) により翻訳が出された。
- 63 ルーカス・クラナハ (Lucas Cranach, 1472—1553) を指すものと思われる。ドイツ・ルネサンス期に活躍したドナウ派画家の一人。本名ルーカス・マーラー (Lucas Mahler)。クラナハは雅名 (勝國興編『世界美術大全集 西洋編第14巻』 pp. 265-274.)。オーバーフランケン地方の城門都市クローナハ (Kronach) に生まれ、1500年頃文化の中心地ウィーンに出て画家としての活動を始める。1504年にヴィッテンベルクのザクセン選帝侯フリードリヒ賢公 (1463—1525, 在位1486—1525) に招かれ宮廷画家として数多くの宗教画や肖像画を残した。

いた。これとは別にかの大男のドイツ人<sup>64</sup>の身体の特徴を余すところ無く描いた絵画も掛かっていた。この大男はちょっと前にめずらしい見世物として各地を連れ回されたそうだ。本人に会ったことはないが、この絵の中では私が立って剣を伸ばしても彼の頭に切っ先が届かない、といった具合だった。十分信用のおける何人もの人達から聞いた話によると、なんとこの大男の姉は彼よりもさらに半エル [約57センチ] も背が高いのだそうだ。市場のそばに建つ教会にはたいそうな値うちの聖水盤と技巧を凝らした模様絵が施されたリュートが置かれている。聖モーリス大聖堂はオットー大帝の建てたもので、非常に豪華。948年、ここにその妃が葬られた。墓碑銘には彼女がイングランド王エドモンド<sup>65</sup>の息女であったと刻まれている。ここにはさらに救世主キリストがガリラヤのカナンの地で水をワインに変えた時に使った三つの水がめ<sup>66</sup>のうちの一つが置かれている。町には合わせて教会が10あるが、上に私が挙げたものが最も美しい。さて我々はマクデブルクから14マイル<sup>67</sup>の距離にあるライプチヒを目指した。移動には1日半かかったが、途中、実り豊かな穀物畑や裕福な村落があちこちに見られる地域を通過した。旅の一切の経費は同行した商人に任せたが、むしろハンブルクからライプチヒまで6人乗り（ついでだがニュルンベルクのは8人乗り）の乗り合い馬車に乗ったほうが良かったかもしれない。それだと旅費は6人で24ドル。ライプチヒからリュネブルクに戻る時にはおそらくもっと低い料金で帰りの馬車を見つけることができるだろう。つまり、この辺りの食費が安いことも考え合わせると、実際の旅程にしてはこの商人に余計に払い過ぎたという訳だ。

ライプチヒ<sup>68</sup>はマイセン地方の非常に豊かな穀倉地帯にあり、裕福な村落

<sup>64</sup> 未詳。

<sup>65</sup> サクソン朝イングランドの王（在位939—959）。

<sup>66</sup> 「ヨハネの福音書」2章6節。水がめの数は「三つ」とあるが、この時代までに出版されていた英訳聖書、Wyclif(1380)、Tyndale(1534)、Cranmer(1539)、Geneva(1557)、Rheims(1582)のどの版にも「六つ」とある。大学出身のモリソンがラテン語もしくはヘブライ語聖書を読んでいた可能性も考えられる。いずれにせよ水がめの数は「六つ」であり、「三つ」という説がどこから来るのかは定かでない。

<sup>67</sup> マクデブルクからライプチヒまでは直線距離で約105キロ。

<sup>68</sup> ザクセン州の都市。ゲルマン人の民族大移動後、スラブ人の防塞村落が形成されていたが、10世紀にドイツ人の東方植民が始まるとドイツ農民の村落も多く建設され、ス

があちこちに見られる。この地方はザクセン選帝侯の管轄下にあり<sup>69</sup>、見渡す限りの平野の中に視界に入る森はひとつだけという広々とした景観である。市内にはこぎれいな街路が敷かれ、広々とした立派な市場があり、同じく堂々とした有力市民の邸宅が並ぶが、これらは加工しやすい石で造られ高さは四階建て。プラハの方角に向かって広がる郊外には便利な水道管が通っている。市を囲む堀は干上がっており、石造りの市壁は崩れかかっている。市民は町の要塞を強化することも、公印として赤い蠟ろうを使うことも許されておらず、夜回りの時に角笛を吹き鳴らすことさえ禁止されている。こういったことは他の都市では許可されているが、この町では1307年に聖トマス教会<sup>70</sup>で市民が君主ディツマヌス（“Ditzmanus”）公<sup>71</sup>を殺害して以来、その他もろもろの権利と共にこれらの行使権がはく奪されてしまった。市壁の外には、（ドイツでは多くの都市がそうであるように）屍骸の埋葬のため美しい空き地があり、「神の庭」（土地の言葉では“Gotts-aker”）と呼ばれている。有力市民は回廊の屋根の下にそれぞれの家格に相応しい区画を埋葬地として購入するが、庶民は覆いのない中庭に埋葬される。そこにこんな墓碑銘を見つけた。ローマ数字はこの人物が亡くなった年号を表す。

“FœLIX qVi in DoMIIno niXVs ab orbe fVgIt.”<sup>72</sup>

このような墓碑銘にはドイツのいたる所でお目にかかることができる。この町には大学があり<sup>73</sup>、プラハ大学<sup>74</sup>の学生が1480年にフス派戦争<sup>75</sup>を避け

---

ラブ人・ドイツ人の混住するところとなった。1287年に市壁を備えた自治都市となる。1539年に宗教改革を受け入れた。宗教争乱の時代も鉱石の輸出、香料や絹の輸入により西方貿易が盛んであったが、繁栄の一方で下層市民も増え、1524年のドイツ農民戦争は近郊に及び、市内でも騒乱が起こった。

<sup>69</sup> ライプチヒがザクセン公領となったのは1485年のこと。

<sup>70</sup> 1212年建立。ザクセン公領となって以後の15～16世紀に増・改築された。したがってモリソンが目にした教会堂は君主殺害事件当時のものとは趣を異にしていたはずである。

<sup>71</sup> 未詳。

<sup>72</sup> Felix qui in Domino nixus ab orbe fugit. 「幸福なるはこの地を離れ、我らが神の元に飛び去りし者」の意。大文字表記のローマ数字を足していけば、

[LIX(59) + V(5) + D(500) + MI(1001) + XV(15) + V(5) + I(1) = 1586] と没年が表れる。

<sup>73</sup> 1409年創設。次注参照。

<sup>74</sup> プラハは中央ボヘミアに位置するこの地方最大の都市で、8～9世紀に市壁が作られ

てこの地へ引越して来たのだったが、今日では衰退もはなはだしい。その理由は、近くに学者にとって快適な住環境を提供してくれるヴィッテンベルクがあるからだ。この地を離れて午後にはヴィッテンベルクへと向かった。その日のうちに4マイル進んで夜にはテーベン (“Teben”) 村<sup>76</sup>に到着したが、ここに来るまで通り抜けるのに2時間もかかる大きな森を通過した。森を出るとエルベ川を渡るまで痩せた土地が続いている。川はヴィッテンベルクのそばをやや距離を置いて東から西へと流れている。

翌日ヴィッテンベルクに向けてさらに4マイル進んだ。この町の名はザクセン公で最初のキリスト教徒であったウィッテキントゥス (“Wittekindus”)<sup>77</sup>から取られたもので砂質の平地の中に位置し、北側の丘陵地帯には酸味の強い葡萄が豊かに実った葡萄園が広がるが、これらはワイン作りには使われない。一本の大通りが市の全長を走り、この通り沿いに見事な建物が立ち並ぶ。大通りの中間地点には大聖堂と市が立つ立派な広場があり、広場の中に議事堂が建つ。西門の近くには大公教会がある。ヴィッテンベルクでは売春婦、

---

て以降西欧と東欧の通商路として発展した。プラハ大学は正式名称をカレル大学 (Universita Karolova Praha) と言い、中部ヨーロッパ最古の大学として神聖ローマ皇帝兼ボヘミア王であったカール四世が1348年に創設した。当時の大学の典型的な学部構成である神学・法学・医学・教養の4学部制をとり、ヨーロッパ各地から学生を集めたが、1409年に大学におけるチェコ人の優位を認める国王の勅令が出るに及びチェコ人とドイツ人との対立が激化。ドイツ人の教師・学生はライプチヒへ退去した。ドイツ人の退去やフス戦争は大学を衰退させた。

75 フス派教徒が皇帝・教会を敵に反乱を起こした宗教改革紛争 (1419—36)。モリソンの1480年というのは時代錯誤で、その頃には既に鎮火されていた。フスはプラハ大で神学を修めたのち同大学の教授に就任したが、ウィクリフの改革思想に共鳴して教会の世俗化を懸念し免罪符の販売を非難したため、1414年にコンスタンツの公会議で異端とされ、翌年焚刑に処された。公会議の処置に激怒したフス派は1419年に急進的な司祭ジェリフスキーに率いられプラハの町で示威行進を行い、反乱は33年にフス派に緩和措置を取ったバーゼル公会議を期として次第に弱化した。この間プラハは穏健派のウトラキスト派の根拠地として、ボヘミア南部のタボルに居を構えた急進派のタボル派と対立した。

76 未詳。

77 ザクセン西部ウェストファーレンの豪族ヴィドゥキント (Widukind) のことか。カール大帝のザクセン地方支配に抵抗して大規模な蜂起を起こしたが、785年に降伏し王宮アティニーでカールを代父として洗礼を受けたのち修道院での隠遁生活に入った (『ドイツ史1』p. 72.)。

学生、ならず者以外の人に会おうと思っても無理だ、というのはよく言われる諺。これと同じことを言いたいのだろう、この教会にはこんな詩が刻まれている。

“Ni Witeberga sues, ni plurima scorta teneret,  
Ni pubem Phœbi, quaso quid esset ibi?”

ヴィッテンベルクには ならず者と売春婦 それに加え  
フォイボスの従者<sup>78</sup> 奴等がいなけりゃこの町じゃない

このような詩からも、この町では学者しか相手にできないので商いは流行らず、通りも汚れきっていることが推察できるだろう。ウイシンベキウス (“Wisinbechius”) 博士<sup>79</sup> の書斎にはこんなことがラテン語で記されている。

《ここにルターが静かに息を引き取った時の寝台が置かれていた》

この町の人々は何でもかんでもルターにゆかりの物としたがる。ルターはこの地で死んだ訳でもここに寝台があった訳でもないのに、彼らはほんの僅かでもルターの名残を残そうとしている。ルターは1483年アイスレーベン (Eisleben)<sup>80</sup> に生まれた。そしてその地のマンスフェルト伯の家で亡くなっていることは確かな事実だ。2月17日の夕食後のこと、彼は持病、すなわち腹部に体液が溜まってしまう病気に襲われて、朝の5時に息を引き取った。1546年2月18日のことだ<sup>81</sup>。臨終に立ち会った伯爵とその奥方、その他大勢の人々はルターの今際の<sup>いまわ</sup>説教に慰みを得た。だが彼の突然の死により、敵意

78 フォイボス (Phoebus) はギリシア神話のオリュンポス十二神の一人。ローマ神話では太陽神アポロ (Apollo)。光明の神としてフォイボス (光り輝く者) という呼称をもち、太陽神ヘリオスと同一視されることもある。詩歌と音楽をつかさどるほか、哲学を庇護することから「フォイボスの従者」とは学者のこと。

79 未詳。

80 原文では “Isleb”。ドイツ中部の町。ヴィッテンベルクから西南西約90キロの地点にある。

81 ルターは1546年1月にマンスフェルト諸侯の係争調停のためアイスレーベンに赴いたが、2月18日に心臓発作により死去、ヴィッテンベルク城の教会に葬られた。

に満ちたイエズス会士たちはこの時とばかりにルターを中傷して、彼は飲み過ぎで死んだとばかりに言いはやした。彼の生き方と死に方を悪く言うことで、彼が始めた宗教改革そのものを誹謗しようという魂胆だ。彼らは（いつものやり口に従って）プラハに住むある男から悪霊を呼び出して証言を取った。この霊はルターが死んだ時に男の体から抜け出していたが、ひとたび戻って来ると一体どこに行っていたのかと詰問を受けた。当然ながら霊はルターの枕元にいた、と答えたのである。さて、フィリップ・メランヒトン<sup>82</sup>——1497年生まれ、没年1560年——もまたルターと同じく著名な人物で、それぞれ記念碑がヴィッテンベルク大公教会に建てられている。この教会はエルサレムにあるのと似ていると言われる<sup>83</sup>。形が丸いことにおいてはそう言えなくもないが、敢えて違うとするならエルサレムの教会は内陣〔教会堂の内部にある司祭や合唱隊が座る席〕が中央にあってその周りを通路が囲む造りだが、この教会の内陣は東端にあるという点が挙げられよう。ヴィッテンベルクの人々はルターについてたくさんの逸話を語るが、そのひとつに壁にインクで記された呪文がある。これは悪魔がルターを誘惑しようとして書いたとされ、聖アウグスティヌス・カレッジにある。さらにこの町にはかの有名な呪術師ファウスト博士<sup>84</sup>が住んでいた家が残っている。聞くところによると、

82 フィリップ・メランヒトン (Philipp Melanchthon, 1497—1560) はドイツの人文主義者、宗教改革者。メランヒトンとは「黒い土」を意味する本名 Schwartzerd(t) をギリシア語化したもの。ドイツ西部ライン川左岸のファルツ地方ブレッテンに武器鍛冶工の子として生まれた。人文主義者として高名なロイヒリン (Johannes Reuchlin, 1455—1522) を大伯父にもち、エラスムスの影響下に養育される。12歳でハイデルベルク大学入学、17歳でチュービンゲン大学の教養学修士号を取得。1518年ヴィッテンベルク大学のギリシア語教授となる。ここでルターの信仰と神学の影響を受けて生涯にわたり彼の協力者となる。

83 「エルサレムにある教会」とは「聖墳墓教会 (Church of the Holy Sepulchre)」のこと。イエス・キリストが十字架につけられたゴルゴタの丘と彼の墓を保存するために、335年コンスタンティヌス大帝によって建てられた世界最古の王立教会のひとつ。現存の教会はおおむね十字軍時代に再建修復されたもの。イエスの墓は当時の典型的ユダヤ式岩窟墓で、復活聖堂 (アナスタシス) と呼ばれるドームの真下に位置している。

84 ゲオルク・ファウスト (Georg Faust)、伝説ではヨハネス (ヨハン)・ファウスト (Johannes Faust) の名で通っている。1480年頃ドイツに生まれハイデルベルクなどで神学を学び、各地を転々としながらルネサンス期の自然哲学の知識を身につけて人文主義者と交わった。彼は既に生前からさまざまな伝説上の魔術師達と混同されて考えら

博士は1500年頃にここに住んでいたが、町はずれの森で1本の木をひからびさせて燃やしたそうだ。彼はその森の中で魔術を行っていたのだ。しかしついに町から程遠からぬ村で亡くなった、と言うよりむしろ悪魔に魂を吸い取られたと言ったほうが本当かもしれない。私は例の燃えた木を実際に見に行き、それから近隣にある村々を時間をかけてくまなく歩いて回ったが、彼の最期にまつわる話を聞くことはできなかった。市からさほど遠くないところにアポロ（“Apollo”）山<sup>85</sup>がそびえている。ここにはかつて薬草が豊かにはびこっていた。町から少し行ったところにある村にはカール五世の野営軍の跡がいくつも残っている。私はこの夏<sup>86</sup>残りの日々をこの地で過ごすことにした。滞在経費は食事とビール——これらは別々に勘定される——を合わせて週に1グルデン。部屋代には年に換算すると10グルデンに相当する家賃を払った。ここでは他の地域に比べると物価が高いので、学者にとって週につき食費1ドル、部屋代と洗濯代にさらに1ドルの出費は普通である。この町から選帝侯クリスティアヌス（“Christianus”）<sup>87</sup>の葬儀を見物しようと思い、フライベルク（Freiberge）<sup>88</sup>まで足を伸ばした。我々3人は目的地まで1日につき1ドルで馬車を雇った。馬のかいばと御者の食事の費用はこちら持ちという条件付きだ。そのため1日の出費にさらに1ドル加算しなければならなかった。それでもこの条件を飲んだのは、好きな時に馬車を乗り捨てることができるという利点があったからである。にもかかわらず結局はライプチヒに戻るまでこの馬車を使った。ライプチヒまで乗ると確約していたならば1日半ドルで済んだことだろう。さて、まず第1日目には穀物畑が広がる砂質の平野を抜けて6マイル進み、トルガウ（Torgau）<sup>89</sup>に着いた。途中でベ

---

れたが、さらにその突然の死（1536—40年頃）が悪魔に生命を奪われたとする奇説を生んで伝説に拍車をかけることとなった。モリソンはその頃上演され好評を博していたクリストファー・マーロウの『フォースタス博士』（*The Tragical History of Doctor Faustus*, 1588年頃初演、1604年出版）を本国の劇場で見ていたかもしれない。

<sup>85</sup> 未詳。

<sup>86</sup> 1591年の夏。

<sup>87</sup> ザクセン選帝侯。未詳。

<sup>88</sup> 原文では“Friburge”。ドレスデンとケムニッツ（Chemnitz）の中間に位置し、ヴィッテンベルクから直線距離でおおよそ110キロ。モリソンはエルベ川沿いにマイセン、ドレスデンを経由するルートを取った。そうした場合、約150キロの行程となる。

ルガー (“Belgar”)<sup>90</sup> という村で食事を取ったが、これにはめいめい5グロート<sup>91</sup> 払った。さらにルターが改革を提唱する最初の説教を行ったイーツァン (“Itzan”) 村<sup>92</sup> を見ることもできた。

---

89 原文では “Torge”。

90 未詳。

91 中世から近世にかけてヨーロッパ全域で使われた額面で、14世紀に銀8分の1オンス（約3.5グラム）の価値を持つと定められたが、実際には時代と地域により相当な価値差があった。

92 未詳。